

ZOCALO 2014 4 ▶ 5

ZOCALO=ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

企画展「ピカソの陶芸—地中海にはぐくまれて」

会期：2014年4月5日(土)～5月18日(日)

大いなる回帰

モネの作品と並んで埼玉県立近代美術館の収蔵品で最も人気のある絵画といえば、ピカソ(1881-1973)の《静物》でしょう。この作品は、ナチス・ドイツがフランスを占領していた1944年の4月に、パリのアトリエで描かれました。当時のヨーロッパでは、多くの芸術家が社会の混乱を避け、大西洋を渡って亡命していきました。しかし、ピカソは違いました。《ゲルニカ》を1937年に発表し、ファシズム的な動きを批判していたピカソは、ナチスから目を付けられ作品の発表を禁じられていましたが、自らの意志でフランスに留まり制作を続けていたのです。この静物画は卓上の小さな世界を主題にしながらも、黒い輪郭線による幾何学的構図と鮮やかな色彩表現のなかで、蠟燭がドラマチックに輝いています。まるで、戦時中のピカソの感情の起伏が伝わってくるかのようです。



パブロ・ピカソ《静物》埼玉県立近代美術館蔵/1944年4月5日に制作された油彩画。この展覧会の初日が、ちょうど70年目にあたる。
©2014-Succession Pablo Picasso-SPDA(JAPAN)

ピカソが陶芸に出会うのは、この静物画を描いたわずか2年後のことです。終戦を迎えたピカソは、南仏に滞在する機会が増えていました。1946年、地中海に近い小さな町ヴァロリスに立ち寄ると、製陶業の伝統をもつこの町でマドゥラ工房を運営するジョルジュ・ラミエと懇意になり、1947年には工房の協力を得て陶芸を本格的に始めました。すでにピカソは60歳代半ばでしたが、戦時中とは全く異なる環境で陶芸に打ち込むようになり、1948年には、早くも149作品に及ぶ陶芸の展覧会をパリで開催しています。

物理的な形と描かれた図柄からなる陶芸は、まさに彫刻と絵画を統合したようなものであり、ピカソにとっては魅力的な表現手段であったに違いありません。また、火、土、水といった自然の力に依る陶芸は偶然性に満ち、ピカソを大いに刺激したはずで、陶芸のこのような特質を直観的に受け止めながら、常識や既成概念を好まないピカソは、伝統的な形を、陶工の力を借りて、変形したり、組み合わせたりしていきました。それをユーモアと遊び心に富んだ視点で新たなイメージに見立て、絵付けを施していったのです。丸い皿は笛を吹く牧神の顔に、水差しは愛嬌のあるふくろうに、3本脚の壺は肘をつく女性となり、イメージの転換を得意とするピカソらしい流儀が、陶芸において次々と開花していきます。

陶芸に出会ったのとちょうど同じ頃、ピカソは若き女性フランソワーズ・ジローと暮らし始めています。ほどなくして子供



パブロ・ピカソ《3本脚の器》1951年 株式会社ヨックモック蔵
©2014-Succession Pablo Picasso-SPDA(JAPAN)



パブロ・ピカソ《小さなふくろう》1949年 株式会社ヨックモック蔵
©2014-Succession Pablo Picasso-SPDA(JAPAN)

がふたり誕生し、ピカソの生活はまさに明るさに満ちていました。南仏の砂浜で子供たちと戯れるピカソの写真は世界的によく知られていますが、その光景は陶芸を始めた頃のピカソの様子を象徴的に伝えています。

こういった南仏での私生活と並行するかのごとく、ピカソの陶芸は大らかさに貫かれています。そこには、当館の静物画から感じ取ることができる、戦時中の重苦しく緊迫した雰囲気はありません。ピカソの陶芸には童心にかえったような、無邪気で、素朴で、奔放な遊びの精神が溢れているのです。そして、その大らかさを包み込むように拡がっていたのが、地中海の風土だったと言えるでしょう。スペインの地中海の港町マラガに生まれ育ったピカソにとって、南仏はまさに故郷に通じるノスタルジックな場所でした。戦争を生き抜いた晩年のピカソが新たに見出した陶芸とは、自らの出自でもあり、古代から芸術・文化をはぐくんできた地中海への大いなる回帰でもあったと言って過言ではありません。

日本スペイン交流400周年事業として開催されるこの展覧会は、ピカソの監修によりマドゥラ工房で制作されたエディションの作品(原作陶器をもとに複数作られた作品)を展示します。また、冷戦下におけるピカソの平和運動への関わりなどにもふれながら、陶芸と同時代に手掛けた版画、ポスター、関連資料も紹介します。伝説の巨匠が到達した晩年の境地を垣間見る、絶好の機会になるはずです。(I.H.)

つけることは感覚的に難しいと感じていましたが、一方で、白木の材を用いるよりも、着色などの何らかの操作を施すことのほうが日本人にとって自然であると考えてもいたようです。矛盾する意識を抱えつつ、木という素材を作品化するのにふさわしい加工とは何かという問いに向き合い導き出した手段のひとつが、この作品の黒く滑らかな表面であり、彫り刻むことで木の表面(この場合はテーブルの天板)に与えた形状を際立たせる効果もまた生み出しています。

展示では、小清水、最上、彦坂(特別出品/個人蔵)の作品に加え、木の板を素材とした先駆的な制作を行った斎藤義重、最小限の加工で素材を芸術表現として成立させる「もの派」の手法を



小清水漸《作業台一皿》1980年、埼玉県立近代美術館蔵

は「対話」というキーワードで提起し、重視したのです。「素材とする木と無関係に何ごとかが発想され、それが木によって表現されるのではなく、木に結びつけて発想されたことが、その木によって作品化される」カタログ序文に記されたこの一文に、中原が考えていたことが端的に示されています。

MOMASコレクションIでは、収蔵作品と寄託作品にみる「木との対話」がテーマです。素材が木である必然性があり、それが作品のかたちや構造と直に結びついている、そんな表現について考えてみたいと思います。小清水漸の《作業台一皿》(1980年)は合板を素材としたテーブル形の作品ですが、これ以前の木の素材感を生かした《作業台》シリーズからは一転して、ウレタン塗料で黒一色に塗装されています。当時小清水は、彫刻に色を



斎藤義重《ブラック・ボックス 4》1991年、埼玉県立近代美術館蔵

現在もなお深化させ続けている菅木志雄の作品なども合わせて紹介する予定です。木を素材とした多様な表現に隠された、それぞれの作家の「木との対話」に耳を傾けていただければと思います。(I.O.)

木との対話、新たに

MOMASコレクションI

「木との対話、新たに」というタイトルは、1979年に西武美術館で開催された展覧会「art today '79 木との対話」を参照したものです。同展を企画した美術批評家の中原佑介は、明晰な論理性をもつ批評で戦後美術を牽引したほか、今なお語り草となっている第10回日本国際美術展「人間と物質」(1970年)やヴェネツィア・ビエンナーレのコミッショナー(1976年、78年)を務めるなど、国際的な仕事も多く手掛けたことで知られています。「木との対話」展は、木を素材に制作している3人の現代作家(小清水漸、彦坂尚嘉、最上壽之)を中原が選び、それぞれの木の表現を紹介した展覧会です。これ以後、80年代前半にかけて木の作品が流行し、木や紙といった素材に焦点を当てた展覧会も続々と開催されました。中原の企画は、作品の素材に目を向けた先駆的な仕事と位置づけることができますが、「対話」というキーワードの選択には、より踏み込んだメッセージが込められているように感じられます。

どんなものでも美術作品の素材として使用できる時代に、作家が自覚的に木を選びとるとすれば、そこには木の特質への意識があるはずで、白木の素材感のよさであったり、絵画作品の土台としての(板絵の)歴史であったり、あるいは、最も身近な材料として私たちの生活を支えてきたことであったり、木に見出すことのできる特質はさまざまでしょう。こうした木の特質が、作家の手によって美術作品としてかたちを成すプロセスこそを、中原



最上壽之《ハッ ドラネコマチャオー》1979年、埼玉県立近代美術館蔵

半年ぶりにオープンします

みなさま、たいへん長らくお待たせいたしました。2014年4月2日より埼玉県立近代美術館が新たにオープンします。

昨年9月からおよそ7か月にわたる全面休館の間、より快適で、より機能的な美術館に生まれ変わるよう、一所懸命に大規模改修工事(第1期)を進めてまいりました。埼玉県立近代美術館を利用してくださるみなさまには、ご不便、ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。開館以来31年間、これほどの長期にわ

たる全面休館はありませんでしたので、みなさまが埼玉県立近代美術館のことをお忘れではないかと不安を募らせておりましたが・・・思い出していただけましたか?!

このたび晴れてみなさまをお迎えする準備が整いましたので、スタッフ一同、心よりお越しをお待ち申し上げております。近くに駐車料金が割引になる提携駐車場もできました。

(→工事のご報告は裏面へ)

次の展覧会 第64回 埼玉県美術展覧会
会期：5/27(火)～6/18(水)